

水稲中後期の管理(肥培管理・水管理)

【肥培管理】

(具体的な資材名や施用量については栽培暦等を参照して下さい。)

1 分けつ期追肥

○施用の条件

- ・主に一般化成肥料使用時、穂肥まで期間があるにも関わらず、肥効が落ちた場合に施用します。
- ・気温が低い年など緩効性肥料・有機質肥料を使用している場合には、後になって急に肥効が現れる場合 があるので、施用にあたっては注意を要します。

2 穂肥

○穂肥と倒伏・収量との関係

- ・穂肥の時期が早すぎたり施用量が多いと、茎が伸びて倒伏しやすくなります。
- ・穂肥の時期が遅すぎたり施用量が不足すると、穂が小さくなります。

(1) 緩効性肥料を使用する場合

○基肥・穂肥の2発タイプの肥料を使用している場合

※品種によって施用時期が違います。

- ・倒伏しやすい品種(朝日, コシヒカリ): 幼穂長 3~10mm 程度の時期(出穂前 19~16 日頃)
- ・その他品種(ヒノヒカリ, アケボノ, 吉備の華): 幼穂長 1~2mm 程度の時期(出穂前 25~20 日頃)

○基肥1発タイプの肥料を使用している場合: 基本的には必要ありません。

(2) 一般化成肥料を使用する場合

※2回に分けて施用します。

第1回目

○効果

- ・大きな穂になり、籾数が増えます。
- ・落ちた葉色が濃くなり、光合成能力が高まります。→籾の退化が防げます。

○時期: 上記、緩効性肥料の欄を参照してください。

第2回目

○効果: 葉色が濃くなり、光合成能力が高まります。→登熟が良くなります。

○時期: 第1回目から10日後です。

【水管理】

ポイント

●土中の酸素不足、土壤還元を防ぐため、間断灌漑を基本とし、生育後期まで根の活力を維持できるようにします。

●早期落水を避け、未熟粒や屑米、胴割れ等による品質低下を防ぎます。

1 分けつ期

・間断灌漑(3湛2落、4湛4落など湛水と自然落水を繰り返す)が基本です。

・通常の施肥をしながら生育が思わしくない時は、根腐れの可能性があります。追肥を考える前に、軽く田を干して様子を見るのが賢明です。

2 中干し・土用干し

<中干し>

・7月上中旬に、ガスの発生など土壤の酸素欠乏による根傷みなどがあるとき等、3~5日程度落水し根の活力を回復させます。

* 中干しが長すぎると、大きなヒビが入り水持ちが悪くなったり、クサネムなどの雑草が生えやすくなりますので注意しましょう。

<土用干し>

・移植後1ヶ月経過して1株の茎数が20~23本以上になったら始めます。

・穂肥の前まで1週間から10日程度行います。土壤条件などにより、足跡が付く程度から軽くひび割れが入る程度とします。

効果(1) 無効分けつが抑制されます。

(2) 根の活性化・伸長が促進されます。

(3) 土が締まることにより、倒伏を防止できます。

3 幼穂形成期から出穂期

- ・稲の生育の中で最も水が必要な時期です。この時期は気温が高く高水温により根腐れが進む可能性も高い時期なので、間断灌漑で土壌中に酸素が供給されやすい状態にします。
- ・穂ばらみ期(出穂前 10～14 日)から出穂期は、水分不足が幼穂の伸長に影響するので、水は切らさないようにします。

4 出穂期から落水期

- ・根の活力維持のため間断灌漑を継続します。
- ・落水は出穂 30 日後を目安として行います。

[\(戻る\)](#)